

W・ヒントン著，加藤祐三・春名徹・加藤幹雄・吉川勇一訳

『翻身——ある中国農村の革命の記録』 I・II

(平凡社 1972年刊 各巻 800円)

私は中国(革命)史については、まったくの素人である。だが、日本近現代史は専攻ということになっており、この時代の日本にとってアジア、とくに中国との関係は切っても切れない深い関係にあることは、あらためて指摘するまでもない。分業としての日本史—東洋史という区分、あるいは自国民族至上主義(ナショナリズム)にも賛成することができないという気持ちが少しばかりあったので“めくら、へびに怖じず”あえて本書を取りあげた。

中国革命は戦中・戦後の世界を揺り動かした大事件であるだけに、日本語で書かれたり邦訳されたりした関係書の数もさすがに少ないものではないようだ。まったく恣意的に机の周辺を探っただけでも、スチュアート・シュラム『毛沢東』(1967年紀伊国屋書店)、ジェローム・チェン『毛沢東と中国革命』(1971年筑摩書房)、B・I・シュヴァルツ『中国共産党史——中国共産主義と毛沢東の抬頭』(1964年慶応通信株式会社)、光玄編訳『星火燎原—中国人民解放軍戦史』第四巻(1971年新人物往来社)、竹内好・野村浩一編『講座中国』第一巻(1967年筑摩書房)、岡本隆三『長征』(1970年潮文庫)、藤村俊郎『中国革命』(1971年三省堂)、浜勝夫『中国の現在と未来』(1973年三一新書)などが出てくる。だが、最後に記した浜書を除けば、これらによっては第二次大戦終了後の中国農村にいったいどのようなことが起こったか、の全貌を知ることができない。ヒントンのこの書は、洛陽近くの一農村・山西省張莊村の1945年8月～48年8月に焦点をあてて、中国革命像を描き切ろうと試みた大著である。私はこの書に出会って初めて、やや中国革命というものの実相を知ったという思いをいま抱いている。以下、要所を抜書して内容の一端を紹介しながら、私自身の感想を書きつらねることで責めをふさぎたい。

最初に、「翻身(フェンシェン)」の語だが、「中国の数億の貧農、雇農にとって、この言葉は、立ちあがること、地主の圧迫をはねのけること、土地や食糧・農具・家屋などを手に入れることを意味していた。それだけではない。迷信を捨て、科学を学び、『文盲』をなくし、読み書きを習い、女性を家財あつかいすることをやめ、両性の平等をうちたて、村長任命制を廃止し、代りに選挙による村政府を作る——つまり新しい世界へ入ることを意味していた。」一言でいえば、旧体制を底から

完全にひっくりかえして、農民たち自身による新しい世界を樹立すること、といったことだろう。

それでは、彼ら中国の農民はそれをどのように実現したのだろうか。

まず、彼らがその身をおいた資本主義的旧体制は次のようなものであった、と記されている。

「……『貧乏人の負債は生れたときからさ。赤ん坊が1カ月になると家族は祝いをしてやるのだが、御馳走をつくるのに借金しなくてはならず、そうして子どもが坐れるようになるまでに、この子はもう地主に借金しているという始末だ。年をとるにつれて利子はふえ、とうとう耐えきれないまでにふくれあがる。』

高利で沈み、重税に苦しめられ、不正市場のワナにかかって、多くの自作農も破産し、自分の土地を一筆一筆と手放し、ついに小作のくびきで首がまわらなくなるか、あるいは工業か運輸業で仕事が見つければ食いつなげるかもしれないという一抹の期待をいだいて都市に流れでる。そうでないものは軍閥の部隊で兵士になるか、地方のゴロツキに身を投じるのであった。」(第一巻63～4ページ)

ここに旧体制中国の姿はほぼ凝縮されていただろう、と思う。いま“昭和元禄”3C時代のアリガタイ日本に住み食らっているわれわれとしては、ちょっと信じられないところもある。だが、農村から人々が追い出され、都会へ流浪し、あげくはふたたび資本のくびき(賃労働従事)へ縛りつけられる、という現象はもう失くなってしまったと言い切れるだろうか。三里塚で、むつ小川原で、志布志湾で、全国いたるところの“辺地”で、緑地・青水がひっくりかえされて醜い赤土が露出しているではないか。そこに住んでいた人は今度はやむなく工場、企業に雇われる。そうしたら、手に入るおカネは毎月、毎年実質的に下がっていく。この物すごいインフレによって一枚の札で買える食物や着物の量の減ったこと！ 同じ値段でもう少し遠くまで行けたのに！ 電話も郵便も上がった！ そうすれば、われわれはもう潜在的には失業者だ。満足な衣食住を保証もしないくせに、資本家どもとその手先はことごとく「あーせいこーせい」と言いつのる。これが賃金奴隷、プロレタリアでなくてなんだ。イマニミテイロ、ボクダッテ、ほんとうに怒る時がある。

そこで、張莊村の「同志」たちは、村にあった日本軍の堡壘を攻撃して勝利し、人民政府をつくり、漢奸(=対敵通謀者)の処刑に立ちあがった(45年8～12月)。

「……1人の若い男……。メガフォンを口にあてて、大声で四方に叫んでいる。

『本日、集会がありまーす。集会でーす。昼食のあと、広場で、集会をひらきます。売国奴、裏切者を弾劾する反漢奸の集会。みなさん、集ってください。』

若者は塔の頂上から地上にむけて、四方に向きをかえて順ぐりに叫ぶ。……

集会！ 20年まえに菜園の所有をめぐる教会とのごたごたがあっという間に、集会など絶えてなかった。張莊で公的な集会がひらかれるのは、じつに20年ぶりである。呼びかけがちょうど昼食の直前だったので、人びとの関心をひき、村中がハチ

の菓をつついたようになってた。……

村の男たちは、自然と一団の前方に集って小屋の前まで来た。遠慮がちで恥かしがりやの女たちは、別に一団を作って、うしろにかたまった。男たちの前でけんかをしたり、押しあいながら小屋のところまで登って行って騒いでいるのは子どもたち。笑ったり叫んだり、押しあいへしあいで、最前列に一番いい場所をとろうとしている。男たちは静かに話しあい、タバコをふかしている。……

……女たちは家からもってきた手仕事に忙しい。天が落ちてこようとも、子どもたちには着るものがなくてはならず、1日はすぐに終わってしまうので、一瞬でももったいないのであった。……

こんな大きな集会なら商売になるにちがいないと、行商人がなん人か、どこからともなくやってきた。乾燥ナツメや油でいったピーナッツ、パン種を入れなくて作った出来たての菓子などを、せっせと売ってまわる。

人びとにまじっているが、よく目だつのが民兵たち。1日か2日まえに組織されたばかりのほやほやだ。銃をもっている者もなくはないが、たいていは赤い房をつけたヤリをもっている。武器に関係なくみな誇りにみち、背をのぼし、注意をおこたらない。……」(第一巻146～9ページ)

楽しそうな集会だ。ちょっとした“お祭り”ではないか。稼ぐのもサボリ飲みたい酒もチョットがまんして、行って声をかけてみたくなる。「バアちゃんや、何を縫っているんだい？」 集会たア、こういうものでなくてはならない。

「急に話声がやんだ。後手にしばられ、身体をわずかによじって頭をたれ、ゆっくりと南の方から広場へ歩いてくる男が見えた。銃を鉞のようにかついだ重装備の民兵に、うしろからこづかれて歩いてくる。しばられている男は郭徳友<sup>クオウテツユウ</sup>。三日前までは、処刑された尚石頭のかわりに村長をつとめていた男である。……

郭徳友とぎこちない護衛のうしろから、数人の農民がやってきた。彼らが直ちに集会の音頭をとった。みんな仰天した。そのうちの一人がなんと張天明<sup>チヤンテイエンミン</sup>ではないか。もう1人は地下の地区指導者の郭黄狗<sup>クオウワウコウ</sup>……」(一巻149～50ページ)

これこそ革命だ。今の今まで村長＝権力者であったものが、「しばられ」「うしろからこづかれ」る。その反対に、これまで平々凡々、まじめな働き手であった農民たちが銃をもち「集会の音頭をと」り、処刑・処分権を握る。“後の者が先になり、先の者が後になる”。これこそ革命だ。しかも、それが到来するのは何百年も先のことでは、ダンジテない。

張天明は演説を始めた。

「『同志諸君、同胞のみなさん！』

背は低い男ぶりがよく、それがすぐにみな注目を集めた。眼光が鋭く色の黒い、落つき払った人物が、わずか数年まえまで裸足でボロを着て走りまわっていた、あの張天明なのだろうか。みな保証人になってやった無口な労働者が、この

男なのだろうか。人さまの前でこの男が話ができるなんて、数年前に誰が想像できただろう。だが確かにこの男だ。一語一語が自然で情熱的だ。『今が好機である。われわれがどんな目にあったか忘れないでほしい。裏切者たちはわれわれの財産を強奪したのだ。われわれを蹴とばし殴りつけた。いまや全世界がわれわれのものだ。われわれには政府と八路軍がついている。昔のつらいことを遠慮なく話そうではないか。血償は必ず支払わさせる。それを世に示してやろうではないか。』

彼はしばらく言葉をとぎらせた。農民たちは一言ものがさず聞きいっているが、内心なにを思っているのか表情にあらわさない。

『これまでどんなにバカにされてきたか。一日としてそれを感じない者はいないはずだ。いまこそ頭を高くして、一人前に話ができるのだ。村はわれわれのものだ。』

……『なにを恐れることがあろうか。裏切者たちを倒せば、われわれの出る番だ。奴らがかすめた財物をわれわれが分配できる。それで新しい生活を始めることができる。』

彼は明快に話した。ことばもアクセントもはっきりしていて、だれにでもわかる。しかし誰ひとり感動をあらわさず、口をひらくものがない。

『この男の罪状をあげる者はいないのか。』

まだ沈黙がつづいた。」（一卷153～4ページ）

革命的な意識をもっていちやく起ちあがり敵を弾劾することのできるのは、今のところ一部少数者だけであった。多数の農民たちはまだまだ警戒の気持を解いていない。「沈黙がつづいた」。そういうとき、行動の口火を切るのは、またまた先進的な前衛分子である。

「副主席になった張貴才は、がまんできずに飛びだして郭徳友のアゴを平手で一発なぐりつけた。『どれだけ盗みとったか、みんなに白状しろ。』

この一発がみなをびくっとさせた。電気が走ったようだった。いままで農民が役人を殴ったことなど誰の記憶にもない。息をつめていても、知らずにかすかな声もれた。すると一人の老人が、はっきりと『あー』という声を発した。

『物納した穀物をたった一袋だけ……』 郭徳友の声をききとれたのは近くにいる者だけだった。

張貴才が大声をだした。『たった一袋だと？』……

『ウソをつくな。』張貴才が、小さくなっている男の顔のまえにこぶしを突きだした。うしろにいた民兵も声をだした。『ウソをつくな！』

すると旧村長はまたふるえあがって、喉の奥でなにかつぶやいた。さらに殴ると、彼はペコペコして、頭を群衆にむけて深ぶかとさげたが、自分のしたことについては一言もいわない。」（一卷155ページ）

やっぱり、旧権力者はなぐらなければならぬ。“百の説教よりも、一つの行動”

だ。

だが、狭い閉鎖的な生活圏のなかにおいて人々は、出处進退をあくまで慎重におこなう。一回の集会では、まだ、大衆の一斉起ちあがりはなかった。集会は延期となる。

「夜になって張天明と張貴才の2人は、村のいろいろな所から貧農を何人か呼びあつめて、かれらが躊躇しているのはなぜかを理解しようと努めた。すぐにわかったことは、原因が恐怖であることだった。」（二巻156ページ）

農民たちは、旧権力者たちの報復を恐れていたのであった。彼らブタどもがふたたび舞いもどって来て、復讐することがこわかったのである。思いきって口を切り弾劾したことを、ムラの人たちはいつまでも覚えている。とつても目立つ。異常事である。あとで、ムラに反動の嵐が吹きあれたとき……そのときがコワイ。

張天明ら人民政府のひとたちは、その晩「呼びあつめた少数の人たちに向って、単純明快に語りかけ、『天の異変』について議論した。国民党軍が戻ってこれるだろうか、と。張天明がつづけた。『もし戻ってきたとしても、わしら若い者は山奥へ入って八路軍と一緒にになれる。心配することはない。いまやらなくては、もう機会はない。』彼は裏切者一派の悪業や殺された申鎖則シエンツオツエと龔来宝クンライバオのこと、自分自身も師福元もどれだけ殴られたか、それにかすめとられた穀物や強制労働の話を、ふたたび並びたてた。

張天明の話で活気づいた農民たちは、やっと口をひらき始め、郭徳友が自分らにどんなことをしたか思い出した。集りがおわると、ちょうど酵母が作用してふくらんでいくように、あちらの小屋、こちらの倒れかけた家々で、話しあいが真夜中すぎまでつづけられた。あまりの興奮に一睡もしない人もいた。村の雄鶏がときをつげるまで、行動をおこすべきかいなか、するならどんな方法がいいか、語りつづけた。

翌日の集会はずっと活気があった。最初にだれが告発の口火をきるかをめぐって議論がたたかわされ、張天明も順序をきめるのに困ったほどであった。」（一巻158ページ）

さて次に、土地革命＝村権力転覆てんぶくの斗いは、いっそう深化し、拡大し、進展しなければならぬ。

「……師福元は誰が『誰を食わせているのか』と問題を提起した。そして一人一人が自分のこれまでの生活、これまでの苦難の歴史を話し、問題の本質をはっきりと描きだしてほしいとアジったのである。

もういちど張貴才チヤンクワイサイが口火をきった。ほかのものを納得させるために、かれは自分の過去を語りだした。『むかし臨県に住んでいたころ、わたしはオジと一緒にいた。オジは結婚するために20銀元の金をかりた。それが一年もたたないうちに15倍の300銀元になってしまった。元金と利息をあわせて。こんな多額の金をかえすこ

となどできはしない。地主はわたしたちの土地もみんな取りあげてしまい、わたしは職を求めて県から県へわたり歩く渡り鳥になってしまったのだ。』

この話は貧農の申天喜に、家を取られた記憶をよびさました。「金がどうしても必要で、われらは家を売りにだしたのだよ。いい値でかってくれるものが現れたが、そこに隣りにすむ地主の申金河が割りこんできて、むりやりに自分に家を売れとおどかしやがって、ただ同然の値でふんだくられた。』

貧農の大洪の女房がいった。『おまえさんは自分の家を売りにださなきゃならなかったが、わたしや父さんにこの身を売りにだされたんだよ。地味のこえた盆地にすんでいたんだが、わたしの家には土地がない。飢饉の年には本当に食べるものがなくなって、しかたなしに両親はわずかな穀物をうけとって、わたしを売りにだした。もしほんのわずかでも土地があれば、わたしや、旦那をみつけて、結婚したにちがいない。馬か牛みたいに売られたんだよ。』

話題は話題をうんだ。子どもを売ったこと、家族が死んだこと、財産をうしなったこと、話しているうちにみんな泣いた。村の幹部がきりこんだ。『こんなふうになったのは、いったいなぜか。なぜわれわれはみな、こんなに苦しんだのだろうか。運命をきめるのは『八字』なのか、あるいはこの土地制度なのか、われわれが払わなくてはならぬ小作料のためなのか。いまこそ地主のやつらを雇って、過去の悪業にむくいてやろうじゃないか。そうしてわるいはずがない。』

張天明はついに行動を提起した。『さて、たった一つの問題は、本当にやるかどうかだ。八路軍と辺区政府はわれわれの側にある。多くのところで地主はすでに打倒された。われわれはこの前例にしたがうだけでよい。われわれは自分の力で行動すればよい。そうしたら、みんなが翻身できるのだ。』（一卷182～3ページ）

権力の本質＝秘密は明らかとなった。この社会において『誰が誰を食わせているのか？』。この大学をじっさいに維持しているのは誰で、そのうえに乘っかり鎮座ましましているのはいったい誰か？ われわれが「自分の力で行動すれば」、そのことは真昼の太陽のもとにあからさまにされるであろう。だがそれにしても、行動に立ちあがるための「同志」がまだ少なすぎる。

「『われらだけじゃ不十分だ。』一人が異論をとらえた。

『ではもっと仲間をつのろう。一人一人ここにいるものが仲間をさがしてくる。貧乏人はみな兄弟だ。われわれが団結すれば、だれも邪魔できない。』

30人がそれぞれ家にもどり、隣人や友人をたずねてまわり、2人、3人とつれてきた。すでに100家族が農民組合に加入することになった。」（一卷183ページ）

そうだ、そのとおり。敵＝権力者＝支配階級には金がある。だから、手(＝労働力)も持っているということになる。それにひきかえ、われわれには金もないし、したがってまた組織的体制＝官僚的体制もない。だが、ただひとつ、敵のゼツタイに持っていないものをひとつ、われわれは持っている。志気である。やる気である。ファイト

である。これは、敵は本質的に持つことができない。われわれは、この「やる気」をもって一部少数をかため、さらに多くの者を合流・団結させることができるのである。

1946年1月すえになって、地主にたいする「清算闘争」がついに開始された（180ページ以下）。まず小グループの集会在いくどか持たれ、そのあと大衆集会在開催された。同時に、逮捕一家宅搜索という実力行使がおこなわれた。集会在話されたことは、ただちに実地で検証された。このようにして、「集会在は1日じゅうつづいた。夕方になって委員会が郭春旺にたいする罪状を数えあげると、かれの返済義務は100穀物袋になることが判明した。」その夜は満月で明るかったので、民兵たちはただちに行動に取りかかった。「民兵たちは測量棒をもって畑に行き、郭春旺の畑をはかってみた。すると、登記されているより実に18ムーも多いことがわかった。20年間ものあいだ、ほかのものが払いに払って無一文にななっているのに、かれは税金をごまかしてきたのである。」（一卷186ページ）

ここで、原点にもどって、いったい全体あれほど閉鎖的・排外的なムラびとたちが、なぜこのように烈しい反権力・反体制の斗争に起ちあがったのだろうか、と問うてみたい。ヒントンは、いう。

「海岸沿いの地方や揚子江沿岸、さらには太原のような後背地の都市における大規模工業の設立、国内市場への工業製品の侵透、10年にわたる華南および華中における内戦、そしてそれらすべてに加えて抗日戦争は、この基本的には停滞した社会を流動的にした。その流動は望ましいものではなく、暴力的であり、しばしば悲劇的でした。1942～43年の飢饉も同じく、大きな役割を果たした。この飢饉はおそらく、太行山地に革命の下地を作る上で他のどのような出来事や影響よりも多くのことを、なしとげたのである——第一に、飢饉によって奪われたおそれるべき生命の数は、すでに広がっていた古い生き方についての疑いを強めた。そして第二に、飢饉は、とても多くの貧しく物を持たぬ人びとを路頭に迷わせた。これらの人びとは遠くへ出ていくことを余儀なくされた。そこで人びとは全く異なる過去を背負った他の災害の被害者たちと会い、話しあったのである。そのことによって、彼らは新しい考え方について聞き、目と耳を開かねばならなかった。そして結局、彼らは、自分たちの経験によってある程度、性格をつくりかえられて故郷に帰ってきたのである。地方の指導者たちがマルクス主義について語ったとき、これらの帰郷者たちは、その言葉が現実に即していることを感じとることができた。帰ってきたものたちは、自分たちに正しいと思われる言葉を歓迎し、もっとそれ以上のことを聞こうと努めたのだった。

出稼ぎにでて工場で働いたことのある者たちは、故郷を離れたことのない者たちに大きな影響を与えた。彼らがもちかえったいく分か広い物の見方は、その友人や隣人たちにもものり移った。この意味で、彼らはねり粉を発酵させる酵母の役割りを果たしたのである。」（二巻255～6ページ）

自分たちとは「全く異なる過去を背負った」他者との出会い、そして心の通じ合い＝交流、それこそが彼らに「いく分か広い物の見方」「新しい考え方」をもたらし、ひいては「ある程度、性格をつくりかえ」たのであった。

ところで、こういった一部先進分子の“考え”が大衆全体のものとなる仕方について、たいへんに興味ぶかいやり方が、中国革命にはあった。“大衆討論”ということで、ふつう「<sup>クーツアオ</sup>略吵」と呼ばれた。この単語は「発酵」という字義があり、アメリカの同義語としては、buzz session ということであるそうだ。

「……各家族からの報告が行われると、議長は『<sup>クーツアオ</sup>略吵、<sup>クーツアオ</sup>略吵』と叫ぶ。すると、勝手に群れをなしていた出席者たちは、その事例について討議をはじめめる。彼らはおよそ納得がゆくまで討議を続ける。部屋の各所で、同意が成り立つと、がやがやは次第に鎮まっていく。と、議長は『<sup>バオカオ</sup>報告、<sup>バオカオ</sup>報告!』と叫ぶ。

その場で咄嗟にまわりの仲間から選ばれた各グループの報告者が、『発酵』の結果、到達した結論を報告する。散らばっている各グループの結論が一致しない場合は、議長が、相違点をはっきりさせ、この事例の事実関係を検討し、対象となっている家族に、一層詳しい報告をもとめる。その上で議長は、また略吵をもとめ、本当の集会の意志が決まるまで、この過程をくり返すのである。投票は行われぬ。」  
(一巻394ページ)

大衆の政治意識が沸騰しているときの決議方式として、これほど素晴らしいやり方はおそらく他にない。ただひとつ問題は、それがたんに中国、あるいはもう少し普遍化して「農村社会」＝「穀物文化圏」にのみ許される仕方なのかもしれない、ということである。ヒントンも言っている。

「これほど熾烈をきわめ、また広く侵透した運動は、農村社会以外で起ることは考えられず、これは長い間不作に悩まされてきた穀物文化圏にだけ限定されるものであろう。私企業を中心とした社会では、こんなに長時間にわたる集会に全村の人が出席することなどは考えられないことである。」(二巻56～7ページ)

だがヒントンよ。光文社のような「私企業」でも、斗争＝ストライキは延々長時間、長期間つづいていておるぞヨ。そうカンタンに特殊化してもらっては困る。

だがしかし、他方において、以上のような中国における経験をそのまま「輸出」してどこかの国で革命を実現しようと試みても、それは“木に縁りて魚を求む”のようなものと言おうか。なにしろ、あの広大な大陸＝面積を、あの広大な人口を、ヨック頭の中にタタこまなくてはならぬ。要するに、ことごとく島国日本とはチガウのだ。上級幹部→下級幹部→一般党员→農民大衆へ、という回路での、あの簡明率直かつ単純素朴でバカバカしいスローガンの侵透。あのような広漠としたモンsoon地帯であらうふうにもしなければ、とにかくまとまりがつかないのだ、と私は思う。——だから、そうナマのかたちで日本に「輸入」されても困るというわけである。

もうひとつ彼我のあいだに問題になってくるのは、かの中国革命途上、資本家一資

本主義に対する攻撃がなされなかったこと、かえって尊重されさえしたことである。まず、ヒントンの言い分。

「土地改革の目的は、おちぶれた資本主義経済の中で少数の資本家たちがなんとかして生みだした芽を全滅させてしまうことではなく、むしろこのような芽を助長してやることであった。したがって商店、農産物加工工場、生産企業、あるいは中国人が所有し実権を握っている近代工場などにおける雇用労働所得などは、個人を封建搾取者か否かと判断する際の考慮には入れられなかった。富農や、地主が所得の一部を綿繰り、搾油工場、商店などから得ていても、それは彼らを分類する考慮の対象外におかれた。そして他の所得を検討した結果、彼らが実際に地主や富農であると判定された場合でも、没収されるのは農業財産だけであり、工業的財産は没収されなかった。彼らは、封建的搾取者であるという点においては反動勢力であるとされたが、資本家は搾取者という点では進歩的であると考えられたのである。そして彼らの封建的財産は人民に分配されたが、資本家的財産は私有財産として手をつけられずに済んだのである。」（二巻141～2ページ）

資本主義的=帝国主義的体制が、政治、経済、社会文化、精神心理……などのあらゆる分野・領域に貫徹しているこの日本のオンボロシステムは、こういった意味連関において、かつての中国農村とまったく別物である。“資本主義が進歩的だ”などとは、いまの大日本帝国中カネとタイコで探しても言い切る者はようあらへん——ブルジョアとその手先を除けば。

中国と日本の違いについて二点ばかり注意を喚起した。すべての中国派の諸君、ヨオック足元を見つめるんだヨーん。さいごに参考書を1冊——ドゥブレ『革命の中の革命』（晶文社）。中国革命方式の“ナマ輸出は大怪我のもと”という格言付きである。

（松沢哲成 1973.6.4）